

コリント人への手紙第二

現代の聖書ではこう呼ばれていますが

実はこれがコリントという町にある教会に送られた

第二の手紙ではないと思われる点がこの手紙の随所に見られます

パウロは宣教旅行の途中コリントでこの共同体を立ち上げました

その話は使徒の働き 18 章に書いてあります

そしてそこを離れたあとパウロは

教会で問題が起きていると聞かされたのです

パウロは問題を正すためにコリント人への手紙第一として

知られる手紙を書いたのですが

どうやら教会の中にはパウロの教えに反発し逆らった人々がいたようです

そのためパウロは相手を悲しませる訪問をして彼らと直接話し

そのあとで苦しみつつ涙ながらに手紙を書いたと言っています

こうした対応のあとに全員ではありませんが

ほとんどのコリントの信徒は自分たちの傲慢さに気づいて

パウロに謝罪し和解を願いました

そこでパウロはこの手紙を書いて

コリント教会に対する彼の愛は変わっていないと伝えたのです

この書は 3 つのセクションからなり

それぞれが違うテーマについて語っています

まず 1 章から 7 章ではコリント教会との和解に決着をつけ

8 章から 9 章ではコリント教会が忘れていた捧げる心について語り

10 章から 13 章ではいまだにパウロを拒絶している

コリントの信徒たちに厳しく問いかけています

ではそれぞれを詳しく見ていきましょう

まずパウロは分裂と不和のさなかでさえ

平安と励ましを与えてくれるあわれみと慰めの神に感謝をささげます

自分の悲しませる訪問が教会をギクシャクさせていることがわかっていたので

パウロは彼らを赦していて心を開いた率直な関係を願っていると仰いました

しかしそもそもなぜ彼らはパウロを拒絶したのでしょうか

この手紙を読み進めると

彼らがパウロを信頼できる指導者とはみなしていなかったことがわかります

というのもパウロは職人としてのわずかな収入しかなく

いつも迫害に苦しみしばしば住むところもなく

そのうえ口が達者な説教者ではなかったからです

それでコリントの信徒たちはもっと裕福で堂々とした指導者に会おうと

パウロを軽く見るようになりついには彼を恥じるようになったのです
パウロはそんな彼らを指導者たちが裕福で雄弁で成功者だからといって重んじているなら
それはイエスに対する裏切りであり間違った価値観によるものと戒めます
真のクリスチャン指導者とは自己宣伝をせず地位も気にしないものです
パウロは自分やほかの使徒たちを
勝利の行進を導く王なるイエスに囚われたしもべだと言っています
彼は人を感心させるようなことには興味がありません
ただイエスという方を指し示すことだけに情熱を傾けています
パウロは3章でコリントの信徒たちが
パウロの権威と資質を保証する推薦状を欲しがったことについて触れています
これはパウロにとって馬鹿げた要求でした
コリント教会はパウロが建てなければ存在しなかったのです
ですから彼ら自身がパウロにリーダーシップがあることの証明であり推薦状なのです
パウロは巧みにエレミヤ書とエゼキエル書を引用し
神の霊が推薦状を心に書き新しい契約の民としたのだと言います
コリントの信徒たちにはそれで充分のはずでした
新しい契約の民について言及したパウロはモーセを仲介者とする
神とイスラエルの古い契約とイエスと聖霊を仲介者とする
神とコリント人の新しい契約を比較します
シナイ山で結ばれた古い契約は神の栄光に満ちていて
それによってモーセが輝いたほどでした
しかしその輝きは色あせていき契約の律法も
イスラエルを本当に造り変えることはできなかったのです
それに比べて新しい契約はさらに栄光に満ちています
なぜならよみがえったイエスは神の栄光であり永遠の存在だからです
そして聖霊がコリント人をイエスのような誠実な人へと造り変えていきます
神の栄光を共有できるなんてまさに驚くべき話です
ただしパウロは4章から7章で十字架は栄光や成功についての
コリント人の価値観を逆転させると教えています
イエスの世界の王としての栄光は
彼の苦しみ十字架そして死を通して現わされたのだからです
イエスは十字架の上ですべての人の罪のために死に
神との和解の道を開き神の救いを現したのですが
それだけではありません
十字架は他者の幸福を追求する犠牲的な愛と徹底的に自己犠牲を払う
神の性質を現わしました

そして十字架に倣った新しい生き方を現わしました
パウロの目標は彼の生き方と働きが十字架をなぞることでした
そのためパウロは非常に謙虚で苦しみと貧困に耐える使徒となりましたが
それはすべてコリントの教会に仕えるためでした
ですからコリント人がパウロの貧しさと苦しみを否定したのは
イエスを否定したのと同じなのです
パウロの生き方とリーダーシップは彼がまぎれもなく十字架で死に
よみがえったイエスをなぞっていることの証拠です
パウロはコリント人との和解を心底願っていましたが
彼らが造り変えられ十字架の逆説を受け入れるまでは
あいまいな態度をとりませんでした
コリント人に熱く訴えたあとパウロは8章から10章で
彼らが施しの心を忘れていと語り始めました
エルサレムではユダヤ人のクリスチャンが飢饉のために貧しくなっていて
パウロは新しく立ち上げたいいくつかの教会からお金を集めました
教会のほとんどは非ユダヤ人でしたが
彼らは救い主イエスにあって一つだということを表すため
救援金を出したのです多くの教会が喜んでささげましたが
パウロと対立していたコリント教会は救援金を用意していませんでした
パウロにとってこれは単にお金の問題ではありませんでした
イエスの良い知らせは本質的には惜しみなく捧げたストーリーであるのに
コリント人はこれによって造り変えられていないことが明らかになったのです
あなたがたは救い主イエスの豊かな恵みを知っています
彼は豊かだったのにあなたがたのために貧しくなり
その貧しさのゆえにあなた方は豊かになったのです
パウロはお金の比喻を使いながらこの福音を語りました
イエスは栄誉や富を捨て貧しいしもべとして死ぬほどに
自分を低くされました
そのおかげで罪と死のために貧しさの中にいた人間が
神の恵みのゆえに引き上げられ豊かにされたのです
クリスチャンはこのことを深く心に留めもっと捧げる人に造り変えられ
他者を助けるために財産そして命さえも分かち合うのです
最後のセクションで
パウロはコリント人と対立することになった主な理由について述べています
それはパウロが皮肉を込めて大使徒と呼ぶ派手な指導者たちのことです
彼らは自分を売り込むためにコリントにやってきて

パウロを貧乏で出来の悪い指導者だと悪口を言ったのです
パウロはもし彼らと自分を比べたいなら
自慢と思われるかもしれないが受けて立つと言いました
彼らはユダヤ人の聖書学者でしょうか
パウロもそうですパリサイ派で聖書を丸ごと暗記していました
彼らはイエスについてよく知っているとの自負があったようですが
パウロはよみがえったイエスを何度も目撃しました
そのうえ天の王座についておられるイエスの幻まで見たのです
そして何よりもパウロはイエスを宣べ伝えるために人生をささげ
心地よく安定した地位を捨てコリント人に一切の金銭を求めませんでした
大使徒たちは大金を要求しましたが
パウロは自分で生活費を稼いでいたのです
しかしそんなことはクリスチャンとして重要ではないから
自慢するつもりはないとパウロは言います
むしろ自分の欠けや弱さを誇るというのです
その足りなさを通してイエスの愛とあわれみを見出すからです
イエスがパウロにこう言いました
わたしの恵みはあなたに充分であり
わたしの力は弱さを通して完全に現れる
手紙の結びの部分でパウロはコリント人に
自分を省みるようにと厳重に警告します
彼らがパウロと彼の生き方を蔑み大使徒たちに心酔するのは
イエスとはどういう方かについて根本のところではわかっていない証拠です
造り変えられたクリスチャンのように生きていない彼らに対して
パウロはもう一度イエスの恵みと愛の前にへりくだるよう呼びかけているのです
第二コリントはパウロの生き方と
十字架を通してイエスが私たちに示した逆説について
興味深い考察を与えてくれます
十字架は私たちの価値観や世界観に問いかけてきます
私たちは成功や学歴富に重きを置いていないでしょうか
神はへりくだりと弱さに重きをおきます
なぜなら神の愛と力はイエスの苦しみと死とよみがえり
によって世界に示されたからです
十字架は人を変える力と聖霊の臨在をもたらし
イエスを信じる者に十字架に倣う生き方という道を示し
それを歩くようにと呼びかけます

これがコリント人への手紙第二です

【要約】

第二コリント書は、コリントという町にある教会に送られた手紙で、パウロが宣教旅行の途中でコリントの共同体を立ち上げ、問題が起きたために書かれました。手紙は3つのセクションに分かれており、和解、施しの心、十字架の逆説について語っています。

最初のセクションでは、パウロはコリント教会との和解を願っており、感謝と訴えが含まれています。彼らはパウロの指導者としての権威を疑問視し、彼の貧しさや苦しみを否定していました。

次に、8章から10章では、コリント教会が施しの心を忘れていることに言及されています。エルサレムでの飢饉のために他の教会が喜んで救援金を出した中で、コリント教会は用意しなかったことが問題視されています。パウロはイエスの犠牲的な愛を強調し、他者を助けることの重要性を語っています。

最後のセクションでは、大使徒と呼ばれる指導者たちについて言及されています。彼らは自分たちを売り込み、パウロを軽視しました。しかし、パウロは謙虚さと十字架の逆説を強調し、イエスの愛と力を通じて価値観を変えるよう呼びかけています。

第二コリント書は、パウロの生き方と、イエスの十字架を通じて示された逆説について考えるための興味深い教訓を提供しています。成功や富に対する価値観を問いかけ、神の愛と力を強調しています。